

栄光遙かなり

THE PRIDE & THE PASSION by NOBUHIKO OCHIAI

落合信彦

栄光遙かなり

THE PRIDE & THE PASSION

落合信彦



集英社

栄光えいこう遙はるかなり

一九八九年六月二十五日 第一刷発行

著者 落合信彦
おちあいのぶひこ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

三二巻 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
出版部 (〇三)二三〇一六一〇〇
電話 販売部 (〇三)二三〇一六三九三
製作課 (〇三)二三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

© N. OCHIAI, Printed in Japan 1989

ISBN4-08-772701-7 C0093

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

栄光 遙かなり

目次

Contents

喝采

5

哄笑

91

墜落

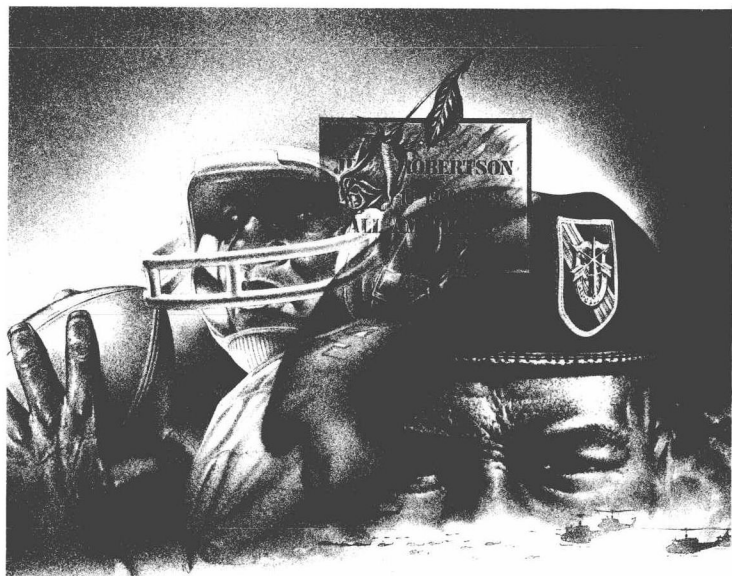
179

Pages

イラスト
デザイナー
西口司郎
多田和博

栄光
遙かなり

喝 采



そのタクシーはサウス・サン・フランシスコの工場街を北に向って走っていた。ウィークデイというのに人気がまったくといっていいほどない。かつては大企業の工場がひしめいていたこの地区であったが、郊外化にもなつて工場は次々と脱出していった。今では街の大部分が廃墟と化し、ルンペンと麻薬患者の巣となつてしまつた。

タクシーは街はずれにポツンと建っている小さな教会の前で止まつた。

東洋人風の男がひとり片手に小さな花束を持って車から降りた。今にも降り出しそうな灰色の空をあいおいで、彼はちよつと体を震わせた。夏とはいえやけに肌寒い。

「十分で戻ってくる」

運転手に言つて男は教会の入口へと向つた。小ぎれいに刈られた芝生にはさまれた小径が真直ぐ入口へつながっている。入口の階段の手前でその小径は左右に別れ、建物を囲むようにして裏口にのびている。男は右側の小径を進んだ。

裏には表ほど大きくはないが芝生の庭があつた。その一角に立ち止まつて男は地面を見降ろした。そこには縦三十センチ、横五十センチほどの大理石のプレートがあつた。

「ジェイク・ロバートソン

一九四五年四月十日」

一九六九年八月二十六日

オール・アメリカン」

と刻まれている。

男はかがみ込んで、手にした花をそっとプレートの上に置いた。

「久しぶりだな、ジェイク」

男がささやくように言った。

うしろから誰かが近づいてくる気配がした。立ち上って振り返った。

スラリと背の高い白人の男だった。年の頃は三十歳そこそこか。柔和な笑いを浮かべている。

「ミスター・ケンジ・ヤマオカですね」

「ええ」

「私はビル・ケインズ牧師です」

と言って彼が手を差し出した。山岡がその手を握った。

「あなたのことはアッシュフォード牧師から聞いています」

「転任されたのですか」

ケインズがうなずいた。

「昨年の八月、ボルチモア市の教会に移りました。以来、私が彼の後任としてこの教会を受け持っているのです」

「そうでしたか。アッシュフォード牧師にはずい分と世話になりました。ここにジェイクを眠らせることができたのも彼のおかげだったのです」

ケインズ牧師がうなずいた。ジェイクを埋葬することを公立墓地さえもが断わったことを、多分、前任者のアッシュフォードから聞いて知っているのだらう。

「きつと安らかに眠っていますよ」

「人間、死んじまったらおしまいです」

急にぶっきらぼうな調子になった。

「あなたは毎年こうして彼の命日には必ず来ているそうですね」

「毎年といってもまだ五年目です」

「しかし、わざわざ日本からいらっしゃるのでしょうか」

「飛行機でひとつ飛びですよ」

「それでも誰ができることではありません。よほど、親しかったのですね、彼とは」

山岡が墓を見降ろした。大きなため息が彼の口からもれた。

「身内以上でした。少なくとも私にとっては。だが何もしてやれなかった。その罪の意識が私をこうしてここに来させるのでしょうか」

牧師がげげんな表情で山岡を見つめた。

山岡が首を振りながら、

「人生とは不公平なものです。あんな素晴らしい奴があんなことをせねばならなかったのですから」

「神が彼の魂を祝福せんことを」
「ゴッド・ブレス・ヒズ・ソウル」

ケインズ牧師が言つて墓標の前にしゃがみ込んだ。そしてしみじみとした口調で、

「初めてこの墓を見た時、私は信じられませんでした。かのオール・アメリカンでハイズマン・トロフィーを受けた名ランニングバックがここに眠っているとは……かつてはアメリカ中の子供たちのアイドルであり、国民的ヒーローでしたからね」

「しかし、今は誰も彼を思い出すこともない……」

牧師が立ち上つて山岡を見た。

「私には不思議でしかたがないのですが……」
と言つてちよつとためらつた。

「彼が銀行強盗をやつたということがですか」

牧師が小さくうなづいて、

「当時の新聞やテレビは、かつての名声と栄光に満ちた過去を持つ男が、きびしい現実に耐えられずにあのような犯行に走つたとレポートしていましたね」

山岡の顔に皮肉っぽい笑いが浮んだ。

「マスコミらしい無責任な解説です。彼はそんな甘ったれじゃなかった。彼はファイターでした。とことん戦つて敗れたのです」

「いずれにしても、今はこうして神の御加護のもとで安らかに眠っていますよ」

牧師がつとめて明るい口調で言つた。

「さあ、それはどうですかね。少なくとも彼が生きてる間、神は何の加護も与えてくれなかった」

気まずい沈黙が流れた。

悪いことを言ってしまったと山岡は思った。

「すいません。失礼なことを言ってしまった」

「何も謝まることなどありませんよ。ミスター・ヤマオカ」

あくまで柔和な語り口だった。

「私だって時々、神に対して怒りをぶつけたくなります。この世には苦悩や不正が多すぎる。神がいるならなんとかしろと叫びたくなる時もあります。しかし、そんな時は自分自身に言いきかせるのです。さまざまな苦悩や不正などは人間が作り出したものであって神の責任ではない。人間が作り出したものなら人間がなんとかせねばならない。それが神の御心みこころであるということです」

再び沈黙。

沈黙をやぶったのは山岡の方だった。

「牧師さん、あなたはベトナムへは行きましたか」

「いや、あの頃、私は神学校に在籍中でした。卒業後、従軍牧師として志願しようとしたが、すでに戦争は終わっていました」

ということ、ケインズ牧師はまだ二十代ということだ。

ケインズ牧師が思い出したように、

「確かジェイクはベトナムで戦った経験がありましたね」

「グリーン・ベレーです。勲章を七個受けました。もったもんなものは何の役にも立ちませんでしたがね」

「七個ですか。そんなことは新聞でもテレビでも触れてませんでしたね」

「政府がマスコミを押えたのですよ。七個も勲章を受けた男が銀行強盗をやったのでは、政府や軍部の面目は丸つぶれですからね」

「……………」

「すべてはベトナムだった」

牧師にというより自分自身に言いかけさせているような山岡の口ぶりだった。

「あのいまわしい戦争さえなければ……」

山岡は目を閉じた。

ジェイク・ロバートソンの精悍な顔がまぶたの奥に浮んだ。白い歯を見せてニッコリと笑った。

十五年前スタンフォードのキャンパスで初めて彼に会った時のことが、昨日のように鮮やかに想い起こされた。

☆

山岡健二があこがれのスタンフォード大学のキャンパスに到着したのは一九六三年九月の初め、入学式を翌日に控えた日だった。

キャンパスをひと目見た時、山岡はまずその広さに圧倒された。建物と建物の間隔が実にゆったりととってあり、グラウンドも野球、フットボール、トラックなどの種目別に作られている。東京で一年間在学した大学とは天と地の差だった。

正面ゲート近くにある事務局で入学手続きをすませた彼は、寮のカギを受けとってキャンパスの東

側にある寮へと向った。手にはポストンバッグひとつという軽装だった。荷物は二カ月前東京から船便で送っておいだ。すでに寮に着いているはずだった。

男子寮の建物は十以上あるが、それぞれに名前がつけられている。山岡の寮はフーバー・ホールという名だった。一九二〇年代末から三〇年代初めにかけての大統領でスタンフォード出身だったハーバート・フーバーにちなんでつけられた名前である。

寮には四人部屋と二人部屋があるが、大学側は山岡のために二人部屋をとってくれていた。四人部屋では外国人学生の彼が余計な気を使うことになるかもしれないし、それが勉強にさしかえないとも限らないという大学側の親心からだった。二人部屋ならある程度のプライバシーもあり、勉強に集中しやすい。しかし、それもルームメイトによりけりである。これについては留学生担当役員が山岡に説明した。

「ハッキリ言つて君には大きなハンディキャップがある。英語が母国語でないため授業についていくのがむずかしいし、全くの異文化圏から来たため人間関係でもいろいろな問題にぶつかかるかもしれない。そんな時、助けてくれるのがルームメイトだ。われわれは学業面でも人間的な面でもアメリカ人を完璧に代表できる学生を君のルームメイトに選んだつもりだ。どんな問題でも彼に話せば必ず相談ののってくれるだろう」

一留学生にこれだけ気を使ってくれることに山岡はいたく感激した。

フーバー・ホールは近代的な三階建ての建物で部屋数が五十、百六十人を収容できるキャバがある。山岡の部屋は一階の入口からすぐのところにあつた。

部屋はタタミ十畳ぐらいのサイズでドアの反対側が大きな窓になっている。白ペンキでぬられた

両側のカベは見るからに厚い。窓に向って机が二つ並びその間に机と同じ高さの本棚がある。ベッドはひとつずつ左右のカベにくっつくように置かれている。

左側の机の上に何冊かの本や文房具が置かれ、本棚の半分も占領されていた。ルームメイトはすでに着いているらしい。

ダンボール箱が三つ、床の隅に置いてある。山岡が東京から送った荷物だった。

やっとスタンフォードの学生になったという実感が徐々にこみ上げてきた。しかし、入っただけでは何の意味もない。大切なのは卒業することだ。それにスカラシップの問題もある。入学に際して大学側は学費の半分をカバーするスカラシップを与えてくれた。残りの半分は、たったひとりの身内である祖父が今までの蓄えから出してくれている。だがその蓄えも無限ではない。祖父が自分のために相当生活を切りつめ、唯一の楽しみであるゴルフも断つて^たいることを山岡は知っていた。この財政的重荷から祖父を解放するには自分がフル・スカラシップ^{全奨学金}をもらうことだ。そのためには一年の一学期目はともかくとして、二学期目はなんとしても上位の成績をおさめねばならない。そうすれば二年目からはフル・スカラシップを獲得できる。

上着を脱いで山岡は荷物を開け始めた。

三つ目のダンボールを片づけている時、ドアが開いてひとりの黒人が入ってきた。背は平均的アメリカ人の高さだが、肩から胸にかけての筋肉は丸首シャツを破らんばかりにもり上っている。顔の作りはいつかテレビで見たハリー・ベラフォンテという黒人歌手に似ている。目が実に知的だ。

「ケンジ・ヤマオカ？ ジェイク・ロバートソン、ユアー・ルームメイト。ウェルカム・トゥ・アメリカ」